

今月の特に惹かれた作品をいくつか。

春風にトロンボーンを組み立てる

長谷川柊香 宮城県

春風のなかトロンボーンを組み立てるのなら、ありふれた光景であるが、『春風に』となると違った印象となる。春風にトロンボーンを組み立てるという行為が、どこか願いごとのようにも思えるのは気のせいではないだろう。

歩道橋から

親友へ手を振れば

世界にふたりだけのゆうぐれ

さいう 愛知県

ふたりだけということがこんなにも美しいのは、もちろん作者の映像の切り取り方にもよるが、登場人物と世界がさびしさをかかえながらも、あたたかくつながっていることがはっきりとわかるからだろう。同じ作者の作品に「どらいあい だね、／って／きみが触れてくる／まぶた／に えいえんみたいなひかり」というのがあるが、この作品も同様の印象を受ける。

ひまわりが父の背丈になっていて

水をあげたら抱きしめてきた

白野 新潟県

ひまわりが父と重なる。『水をあげたら抱きしめてきた』という少し突き放した一節が、懐かしい喪失にも似た感情をうまく表現している。

殻の中から
わたしの心を手渡して
信じるときは赤鬼になる

豊富 瑞歩 茨城県

『信じるときは赤鬼になる』という一節に惹かれる。それは、信じること以外の可能性を消去するという、信じること自体の残酷さを上手く捉えているからに違いない。

九九一覽褪せて緋色の冬終わる

奎いう子 佐賀県

確かに昔、多くの家庭には九九一覽が貼ってあった。それは親の子どもへの期待というよりも、計算くらいはできるようにというささやかな願いであったに違いない。それが色褪せるということは、そうした季節も終わりをむかえ子らも自らの道を歩んでいったということなのだろう。

ペットボトルのココアを振ると
冬銀河

吉沢 美香 宮城県

ペットボトルを振るという日常的なしぐさが、冬銀河へとつながるときカタルシスにも似た感情が沸きあがるのは不思議ではない。自身が自然の一部であるという、世界との調和の在り方は、過去だけのものではなく現在にもつうじるものだろう。

羽の形に風をくり抜いて、
この星みたいに、さびしいね
私たちって。

こはくいろ 大阪府

羽の形に風をくり抜くこと、そしてこの星みたいにさびしがること。世界はそんなにも孤独で、そんなにもすばらしいと作品は語りかける。

跳ね橋に春の光は「る」のかたち

玻璃 愛媛県

『は』と『る』の韻が心地良い。跳ね橋の上の春の光りはとてもたのしそうで、まるでスキップしているかのような印象を受ける。

死を待っているの私と雪だるま

日下部 友奏 群馬県

誰も死を待っている存在でしかないと知ってはいるのだけれども普段は忘れてる。あたりまえのことなのに、こんなにも心を動かされるのはどうしてなのだろう。

若布もどる

せいしは闇をさまよう

にしざわゆうと 福井県

硬質な抒情。同じ作者の「春は曙、横断歩道の冷たくて」という作品もそうだけれども。作品は書き手の鋭敏な感覚の投影であるかのようである。

学級文庫の選書が

やさしいひとだった

元担任の逮捕聞く朝

汐見りら 東京都

『学級文庫の選書が／やさしいひとだった』という一節は意味的に飛躍していて違和感があるが、それは元担任の逮捕という衝撃的なフレーズで解消される。生きているあいだには時に思いもよらないことに出会うことがあるが、それを描き切ろうとしたことがリアルな表現につながっている。